

保健体育科

高校3年時における選択制体育の成果 に関する事例的研究

川合 勇治 飯島 幸久 中村 明彦

I. 緒言

中学校・高等学校段階における選択制体育導入の必要性は、学習者の立場を重視した体育学習や、発育段階・個性を考慮した体育活動のあり方についての検討を背景として論じられてきた。選択制体育には、生涯スポーツのための学校体育の具体的方策として社会的な期待が寄せられており、この点からも導入の必要性が強調されている。つまり、選択制体育によって、学習者が得意なスポーツを身につけ、後に社会におけるスポーツとして活用できることや、スポーツとしてのつながりはなくてもスポーツに対する態度やスポーツの行い方・楽しみ方の転移を期待できるという意義に注目し、生涯にわたってスポーツを楽しむ人間づくりのために、選択制体育に期待をもとうとするものである。

本校では、昭和52年より高校3年時に選択制体育を導入し、以来継続して実施している。そのねらいは、中高一貫6ヶ年教育の最終段階の体育学習の中で生涯スポーツの基礎づくりを重視しようとしたものである。そのために、授業内容を基本的にゲームを中心とした学習プログラムとし、学習者集団が自主的に運動を楽しむための組織づくりに重点を置いている。これまで、10年間にわたって、この選択制体育を実施し現在では定着した感はあるが、その成果についての実証的検証が十分行われてきたとは言い難い。

そこで本稿は、本校における選択制体育を手がかりとして、その成果について事例的に検討するものである。具体的には、選択制体育の成果を学習者の体育学習に対するモチベーション、運動の継続希望、運動の価値観でとらえ、選択制体育の学習者（3年生）と未学習者（2年生）との比較を行うこと、さらに、選択制体育学習者の選択制体育に対する評価と成果との関係を分析することが研究の目的である。究極的には、選択制体育運営の指針を得ようとするものである。

II. 方法

1. 概念と操作化

①モチベーション：一般的には、動機 (motive) が、動因 (drive) と呼ばれる生体内のエネルギーによって、人間が行動に駆り立てられ、特定の目標の達成をもたらす一連の過程として捉えられ、「動機づけ」と訳されている。ここでは、学習者の体育学習に対する積極性を規定する動機的エネルギーと定義し、期待理論^{注1)}に基づいてその得点を以下の式により算出した。

$$\text{モチベーション強度} = (E \rightarrow P) \Sigma (P \rightarrow O) (V)$$

- ・ E→P 努力 (effort) が遂行 (performance) をもたらすかどうかの主観的確率 < 5段階得点 >
- ・ P→O 遂行が報酬 (outcome) をもたらすかどうかの主観的確率 < 6項目・5段階得点 >
- ・ V 報酬に対する魅力・誘意性 (valence) < P→Oと同一 >

なお、6項目の報酬^{注2)}のうち、自己の内面から発生するもの3項目 (内的報酬) について上記の計算をしたものを内的モチベーション、他から与えられるもの3項目 (外的報酬) について同様の操作をしたものを外的モチベーションとした。

2. 調査内容と分析手続き

学習者のモチベーションを測る要因として、(E→P) 期待1項目、報酬6項目に対する (P→O) 期待および報酬誘意性 (V) を設定し、それぞれ5段階のリッカートスケールにより評定を求めた。

次に、運動・スポーツに対する価値観8項目、運動の継続希望についても、5段階尺度で回答を求めた。

また、選択制体育に対する評価は、「楽しさの高まり」、「技能の向上」、「知識の深まり」、「好嫌度の変化」の4項目を設定し、3年生のみを対象に2年時までの体育との比較から、肯定的・変化なし・否定的の3段階で評価を求めた。

3. 調査

本校高校2・3年生を対象として、質問紙による調査を行った。調査期日は、昭和62年10月であり、今回分析に用いた有効回答標本数は、次に示すとおりであ

る。

学年 性	3年	2年	計
男子	61	66	127
女子	62	60	122
全体	123	126	249

Ⅲ. 本校における選択制体育の現状およびその成果についての考察

1. 本校における選択制体育の現状

(1) 学習者の教材選択について

① 選択時期・方法

高校2年時の年度末(2～3月)において、アンケート調査を実施する。(これより先に選択制体育についてのガイダンスを実施)

② アンケート調査

施設・用具などによる制約から、男子については11種目、女子については9種目の種目群の中より、各自第1～第6希望までの種目を選択し記入する。

選択種目群

男子……バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、軟式野球、軟式テニス、ソフトボール、バドミントン、卓球、サッカー、水泳、柔道(11種目)
女子……バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、ソフトボール、卓球、バドミントン、軟式テニス、水泳、柔道(9種目)

③ 基本的原則

・年間で4期に分け、1人につき4種目を学習

表1. 昭和62年度 選択体育の展開

I期 4・5月(15h)	II期 6・7月(11h)	III期 9・10月(18h)	IV期 11～1月(15h)
軟式テニス 〈テニスコート〉 コート：3面 男子：15人 女子：20人 計(35人)	軟式テニス 〈テニスコート〉 コート：3面 男子：14人 女子：24人 計(38人)	軟式野球 〈グラウンド〉 競技場：1面 男子(25人)	サッカー 〈グラウンド〉 競技場：1面 男子(33人)
ソフトボール 〈グラウンド〉 競技場：2面 男子：28人 女子：21人 計(49人)	水泳 〈プール〉 25m・7コース 男子：9人 女子：8人 計(17人)	女子バレーボール 〈第二体育館〉 コート：2面 女子(38人)	ハンドボール 〈テニスコート〉 コート：2面 男子：16人 女子：26人 計(42人)
バレーボール 〈第二体育館〉 コート：2面 男子：17人 女子：14人 計(31人)	男子バスケットボール 〈第二体育館〉 コート：2面 男子(44人)	卓球 〈第一体育館〉 卓球台：8台 男子：18人 女子：15人 計(33人)	卓球 〈第一体育館〉 卓球台：8台 男子：19人 女子：11人 計(30人)
バドミントン 〈第一体育館〉 コート：3面 男子：7人 女子：11人 計(18人)	女子バスケットボール 〈第一体育館〉 コート：2面 女子(44人)	バドミントン 〈第一体育館〉 コート：3面 男子：25人 女子：14人 計(39人)	女子バドミントン 〈第一体育館〉 コート：3面 女子(30人)

- ・ 1 期間 4 展開
- ・ 希望の多い種目から優先的に実施

(2) 評価について

出席点…… 5 段階

技能点…… 3 段階

態度点…… 2 段階

合計…… 10 段階

(3) 昭和62年度の選択体育展開について

表 1 は、本校における選択制体育の具体的な展開例として、昭和62年度について示した。

2. 本校における選択制体育の成果についての考察

(1) 運動・スポーツに対する価値観

表 2 は、運動やスポーツがもたらす効果 8 項目について、学習者がどの程度の価値観をもっているかをみるために、リッカート法 (5 段階スケール) により求めた評価の平均値を示したものである。

表 2. 運動・スポーツに対する価値観 (平均値)

学年 項目 番号	3 年			2 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
1	4.25	4.05	4.17	4.11	4.12	4.11
2	4.16	4.03	4.10	3.91	4.18	4.04
3	4.08	4.00	4.04	3.89	3.92	3.91
4	4.03	4.03	4.03	3.74	3.92	3.83
5	3.38	3.31	3.34	3.02	3.05	3.03
6	3.10	2.95	3.02	3.11	2.83	2.98
7	3.66	3.39	3.52	3.80	3.62	3.71
8	3.90	3.53	3.72	3.92	3.63	3.78

<価値観項目>

1. 体力がつく
2. 健康になる
3. 気分転換になる
4. 他人と楽しむことができる
5. 公平な態度が身につく
6. 他の人に認められる
7. 自分の力を試すことができる
8. 技能が身につく

「自分の力を試すことができる」、「技能が身につく」の 2 項目を除いて、他の項目は 2 年生よりも 3 年生の方が価値観が高くなっている。特に、2 年生に比較して 3 年生が高い価値観をもっているのは、「体力がつく」、「気分転換になる」、「他人と楽しむことができる」、「公平な態度が身につく」などの項目である。

全体的には、選択制体育の学習者である 3 年生の方が高い価値観をもっているといえ、学習成果としてとらえてよいと思われる。また、3 年生の中では、女子に比べ男子の方が価値観が高く、特に、「他の人に認

められる」の項目についてその差が大きく、承認欲求が男子に強いことを表わしている。

(2) 運動・スポーツの継続希望

表 3 は、運動やスポーツに対する卒業後の継続希望について、5 段階尺度で回答を求めたものであり、表 4 にその平均値を示した。

表 3. 運動の継続希望 n (%)

学年 希望	3 年			2 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
1(弱)	/	1(1.6)	1(0.8)	2(3.1)	1(1.7)	3(2.4)
2	4(6.6)	8(12.9)	12(9.6)	3(4.6)	6(10.0)	9(7.2)
3	13(21.3)	8(12.9)	21(17.1)	12(18.5)	7(11.7)	19(15.2)
4	28(45.9)	33(53.2)	61(49.6)	39(60.0)	41(68.3)	80(64.0)
5(強)	16(26.2)	12(19.4)	28(22.8)	9(13.8)	5(8.3)	14(11.2)

1. ぜったいにやりたくない
2. あまりやりたくない
3. どちらともいえない
4. できればやりたい
5. 少し無理をしてもやりたい

表 4. 運動の継続希望 (平均値)

3 年			2 年		
男子	女子	全体	男子	女子	全体
3.92	3.76	3.84	3.77	3.72	3.74

2 年生、3 年生共に、「できれば行いたい」という回答が多く、消極的な回答は少ない。「ぜひ行いたい」という強い希望は、3 年生に多く、その中でも男子に多くなっている。つまり、選択制体育の学習者の方が運動やスポーツの継続希望が強いといえる。

このことから、一斉指導の体育学習では、学習者が受動的態度になりやすく、その結果「できれば行いたい」といった希望にとどまり、積極的な運動・スポーツの実践希望には結びつきにくいと思われる。この問題は、授業目標 (技術志向、運動の楽しさ志向など) と関係するが、ここでのデータからは、選択制体育が生涯スポーツに貢献し得る有効な方法であり、特に男子についてその結果が期待できることを示唆するものと解釈できる。

(3) モチベーション

① 体育学習における目標

表 5 は、学習者個人が体育の学習にあたって、どのような目標をもっているかについて単数回答 (SA) で求めたものを示した。

表5. 体育での目標 —SA— n (%)

学年 目標	3年			2年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
1	12(20.0)	6(9.7)	18(14.8)	13(19.7)	19(31.7)	32(25.4)
2	5(8.3)	／／	5(4.1)	3(4.5)	／／	3(2.4)
3	28(46.7)	32(51.6)	60(49.2)	17(25.8)	18(30.0)	35(27.8)
4	1(1.7)	／／	1(0.8)	／／	／／	／／
5	7(11.7)	4(6.5)	11(9.0)	7(10.6)	5(8.3)	12(9.5)
6	4(6.7)	6(9.7)	10(8.2)	9(13.6)	5(8.3)	14(11.1)
7	／／	2(3.2)	2(1.6)	4(1.6)	1(1.7)	5(4.0)
8	3(5.0)	12(19.4)	15(12.3)	13(19.7)	12(20.0)	25(19.8)

1. 技能の上達・記録の向上
2. 仲間との競争
3. 仲間と運動を楽しむ
4. 礼儀や態度を身につける
5. からだをきたえる
6. 気晴らしをする
7. その他
8. 目標意識なし

体育の学習にあたって明確な目標意識のない者は、2年生に多く、したがって、選択制体育の方が学習者により主体的な授業参加が期待できることを裏付けている。また、3年生は、運動の楽しさに目標を置いているのに対し、2年生は、技能や記録の向上に目標を置いている傾向がある。この結果は、授業の目標や方法の違いによる影響も大であると思われる。

②モチベーション得点

次に、学習者個々の目標に基づいて、その達成に向けての動機エネルギー（モチベーション）を得点化し、その平均値を算出した。他から与えられる報酬に動機づけられる外的モチベーションの平均得点を表6に、内面に発生する報酬に動機づけられる内的モチベーションの平均得点を表7に、そして、外的モチベーションと内的モチベーションとの和として表わされる期待型モチベーションの平均得点を表8にそれぞれ示した。

表6. 外的モチベーション得点（平均値）

学年	性別	男子	女子	全体
3年		150.72	113.50	131.96
2年		116.47	120.30	118.29

表7. 内的モチベーション得点（平均値）

学年	性別	男子	女子	全体
3年		204.43	193.97	199.15
2年		163.70	175.92	169.51

表8. 期待型モチベーション得点（平均値）

学年	性別	男子	女子	全体
3年		341.79	307.47	324.49
2年		280.17	296.23	287.82

2年生、3年生ともに、外的モチベーションよりも内的モチベーションの平均得点の方が高い。一般的に期待理論では、内的報酬の方が外的報酬に比較して「成果」と「満足」をより強く結びつけ、より強い動機づけに貢献すると考えられており、したがって、この結果は好ましい傾向であると判断できる。

また、外的モチベーション、内的モチベーションともに3年生の方が高く、3年生では男子の方が、2年生では女子の方が高くなっている。この結果から、選択制の体育学習がモチベーションの高揚に貢献していることは予想されるが、性別による差は、他の個人属性との関わりが大きいのと思われるので断定的な考察は避けたい。

(4) 選択制体育に対する評価

表9は、3年生を対象に、選択制体育に対する評価4項目について3段階の評定を求めたものであり、表10は、その平均値を示したものである。

全体的に「楽しさの高まり」に対して肯定的であり、「技能の向上」や「知識の深まり」に対しては変化なしという評価が多い。また、男子に比べ女子の方が、すべての項目に対して、肯定的評価が多い。

表9. 選択制体育に対する認知
(高校2年までの体育の授業との比較) n(%)

性別	項目 認知	楽しさの 高まり	技能の 向上	知識の 深まり	好嫌度の 変化
		肯定的	48(78.7)	19(31.1)	17(27.9)
男子	変化無	12(19.7)	39(63.9)	40(65.6)	33(54.1)
	否定的	1(1.6)	3(4.9)	4(6.6)	／／／
	肯定的	56(90.3)	22(35.5)	25(40.3)	37(59.7)
女子	変化無	6(9.7)	36(58.1)	32(51.6)	25(40.3)
	否定的	／／／	4(6.5)	5(8.1)	／／／
	肯定的	104(84.6)	41(33.3)	42(34.1)	65(52.8)
全体	変化無	18(14.6)	75(61.0)	72(58.5)	58(47.2)
	否定的	1(0.8)	7(5.7)	9(7.3)	／／／

表10. 選択制体育に対する認知（平均値）

認知	性別	男子	女子	全体
楽しさの高まり		2.77	2.90	2.84
技能の向上		2.26	2.29	2.28
知識の深まり		2.21	2.32	2.27
好嫌度の変化		2.46	2.60	2.53

選択制体育は、2年生までの学習成果としてある程度学習者が技能や知識を身につけていることを前提としている。その意味では必然的結果ともいえるが、ここでの結果は、選択制の体育学習が、学習者に運動の楽しさを与え、運動に対する好意的な認識に貢献していることを示すものと考えられる。

(5) 選択制体育に対する評価と運動・スポーツの価値観・継続希望・モチベーションとの相関関係

表11は、選択制体育に対する評価4項目と運動・スポーツの価値観8項目・継続希望およびモチベーションとの間の相関関係について示した。

表11. 選択制体育の認知と継続希望・モチベーションとの相関関係

	楽しさの高まり	技能の向上	知識の深まり	好嫌度の変化
価値観, 1		※ .2260		※ .2001
〃 2		※※※ .3400	※※※ .2774	※ .2260
〃 3			※ .2096	
〃 4			※ .2013	※ .1805
〃 5		※※ .2662	※ .2179	
〃 6		※※※ .3001	※※※ .2740	
〃 7		※※※ .3733	※※ .2692	※※ .2576
〃 8		※※ .2619	※※※ .2764	※ .1674
継続希望	※ .1765	※※※ .2783	※※※ .3399	※※※ .2953
外的モチベーション		※※ .2390	※ .1736	
内的モチベーション		※※※ .3303	※※ .2661	※※※ .2843
期待型モチベーション		※※※ .3630	※※※ .2834	※※※ .2863

※ P<0.05
 ※※ P<0.01
 ※※※ P<0.001

「楽しさの高まり」については、その評価(回答)にばらつきが少なく、顕著な関係がみられなかった。「技能の向上」、「知識の深まり」、「好嫌度の変化」に対する評価については、価値観・継続希望・モチベーションとの間に高い相関が認められる。中でも特に、運動の継続希望との間に高い相関がある。

したがって、選択制体育に対する評価は、運動・スポーツに対する主体的条件に影響するといえる。このことは、選択制体育が生涯スポーツに対して有効な体育の手だてであり、また、その成果が運動・スポーツ

に対する積極的・好意的な態度の形成に寄与し得ることを示唆していると思われる。

IV. 結論

以上のように、選択制体育の成果について選択制体育の学習者(3年生)と未学習者(2年生)との比較を中心に検討を行った。その結果、次のことが明らかにできたと考える。

1. 選択制体育の学習者の方が未学習者に比較して、運動・スポーツに対する価値観やモチベーションが高く、また、運動・スポーツを継続して実践しようとする意欲も高い。この傾向は、女子よりも男子に顕著である。したがって、選択制体育が学習者にもたらす成果は重要な意味をもつ。
2. 選択制体育は、運動の楽しさを高め、運動に対する積極的・好意的な意識づくりに貢献している。すなわち、生涯スポーツの基礎づくり(運動・スポーツ好きな人間育成)にとって、選択制体育は有効な手だてである。

今回の考察では、選択制体育授業における学習指導過程を問題にできなかったが、学習成果を語る場合、不可欠な条件であり、この点を今後の課題としたい。

脚注

注1). 行動を方向づける力(モチベーション)は、自分の行動(努力)が特定の目標達成(結果)に結びつくであろうという主観的な確率と、その目標(結果)に自分が感じる魅力・誘意性(valence)との相乗の効果によって決まるというものである。

注2). (P→O)期待, および報酬誘意性(V)を測定する際の数値は、1~9が望ましいとされている。ここでは、内的報酬, 外的報酬の数値を揃えて、各3項目とした。

- 内的報酬: 「満足感や喜びを感じる」
 「学校生活が充実する」
 「運動の楽しさを感じる」
 外的報酬: 「先生にほめられたり、体育の成績が上がる」
 「仲間から認められたり、ほめられたりする」
 「仲間からの人気や信頼が得られる」